

## 簡素化使用域としての「野球トーク」

### — 社会言語学的考察 —

石黒 敏 明

言語使用域とは、社会言語学の専門用語の一つで、T. B. W. Reid (1956) が最初に、特定の状況で使用される適切な言語変種をレジスターと定義した。その後も、種々の学者が、レジスターの概念を洗練しながら、主なる状況的パラメーターを確立してきた (Leech 1966; Gregory 1967; Halliday 1968, 1980; Ellis and Ure 1969)。例えば、Halliday (1968) はフィールド(場)、モード(様式)、スタイル(文体)というパラメーターを提案し、さらに Halliday (1980) は、これらのパラメーターを修正し、フィールド、テナー、モードとした。フィールドとは、言語使用の場面で何が起きているか、テナーとは、どのような人(参加者)が関連しているか、さらにモードとは、どのような方法で伝達されているか、を意味するパラメーターである。一方、Ellis and Ure は、フィールド、モード、役割、フォーマリティと異なるパラメーターを確立した。しかし、Ferguson (1983:155) によると、先のパラメーター手法は、多くの使用域研究家に満足行くものではなかった。なぜなら、「言語の構造的差異に対応する状況的・機能的特徴は、提案されているパラメーター間を横断したり、またはそれらの外に存在したり、またはそれらのパラメーターの内部に組み込まれているかもしれない」からと主張した。

それでは、Baby Talk (Ferguson 1977)、Foreigner Talk (1975, 1981)、Sports Announcer Talk (1983) などの簡素化使用域 (Ferguson 1981; 1982) を提案した Ferguson は、どのようにレジスターを考えていたか、

振り返る。Ferguson は、最も簡潔にレジスターを次のように説明する。

今ここについたてがあり、その向こうからある会話が漏れてくるとする。ほんの少し、聞いただけで、BT (Baby Talk) なら、母親 (または世話人) と赤ん坊のものであることが察知できる。また日本語のFT (Foreigner Talk) なら、日本語を母語とする日本人とほとんど日本語の分からない外国人との対話だと分かる。あるいは野球のSAT (Sports Announcer Talk) なら、ついたての向こうから流れてくる解説は、ラジオ野球実況放送中のアナウンサーによるものだとわかる。なぜならそれら母親、母語話者、アナウンサーは、身に付けているレジスターの中から、「普通の会話」とは違う、その状況に合う一つの特徴ある言語使用域を利用しているからである。

そこで、それら特定のレジスターを見つけ出す (locateする) ために、実際にデータを収集し、語彙から、決り文句、さらに文構造に至るまでその特徴を分析した。共通して見られる現象は、簡素化であった。Ferguson はそれらの使用域を「簡素化使用域」と名づけた。さらにその簡素化使用域が使われる共通する原因 (源あるいはソース) として、普通の成人話者としての言語能力と比較し、聞き手においては何らかの意味で言語能力または状況的に制限がある。「制限」とは、BT や FT の場合、幼児や外国人において、大人の言語能力と比較し劣っている、すなわち言語能力面での制限があることを意味する。また、SAT (ラジオ実況放送) においては、聴衆者は実況放送しているアナウンサーと比較し、フィールドでの選手の動きに関して、視覚的にハンディを受けている。すなわち、聴衆者は視覚的に「制限」されている。そして、その制限の存在によりそれぞれの話者は、状況に適する特定のレジスターを選択するとした。

今回の論文では、石黒 (1984) の野球実況放送からのデータに加え、ハワイ大学における生の野球場やソフトボール球場で聞く SAT やその他の周辺の英語の特徴を記述し、より包括的な「野球トーク」ともいえるレジスターを描写してみたい。また、そのレジスターの特徴を引き出す源、すなわちソースは、他の簡素化使用域 BT、FT、SAT のものと同質であるか

どうかを、判断してみたい。

## I. うぐいす嬢言葉：

スタジアムでは、いわゆる「うぐいす嬢」（ここでは必ずしも女性だけではないが）が SAT というレジスターを使用しているかどうか、収集した文例からその特徴を記述する。SAT を瞬時に認識させる特徴の一つは「決まり文句」による選手の簡潔紹介（briefing）であり、さらに選手の動作描写の記述（reporting）に見られる文法的特徴でもある。アナウンス室のうぐいす嬢が持っている情報、すなわち選手に関するもの（背番号、守備位置、選手名など）は、いわゆるアナウンサーにとって既知情報だが、観客にとって新情報である場合が多い。すなわち観客にとっては制限されている情報とでも言える。だからこそ、うぐいす嬢は随時、観客に情報を流す必要がある。初めに、SAT に見られる、典型的な「決り文句」から記述する。

### 1) 打者・走者の紹介：

バッター・ボックスに立つ選手紹介がうぐいす嬢の初めの仕事である。基本は決まり文句の巧みな使用であるが、そこに語彙や文構造のバラエティが見られるのは専門職能力の一部であろう。各イニング最初の打者を紹介する最も基本的な文を、石黒（1984:30）から引用する。括弧は省略可能であることを示す。この頻繁に見られる省略は、簡素化使用域の特徴でもある。異様に感じた表現は、女子ソフトにもかかわらず守備名には、baseman と man をつける点。また Tokyo とは東京女子体育大学をさし、空白の下線には選手名が入る。

S1: Leading off (the top (half) of the 1<sup>st</sup> inning) for Tokyo (is)#12, second baseman, \_\_\_\_\_.[注1]

最初の打者だけ、上のように Leading off と紹介され、それ以降の打者は

S2からS6のようなバラエティに富んだ表現で紹介される。うぐいす嬢が紹介する一選手の紹介文中での守備位置の順序は、S1のように背番号の後に来たり、S2のように背番号の前に来ることもあり、さらにS3のように選手名の後に付けた場合もあり流動的である。

S2: (Now) batting (for Tokyo) (is) center fielder, #12, \_\_\_\_\_.

S3: At bat (is) #12, \_\_\_\_\_, second baseman.

ホーム・ベースとかホーム・プレートと日本語で呼ぶが、英語では単に plate や base と呼ぶ。さらに1・2・3塁ベースは、もともと袋状なので bag や sack とも呼ぶ。しかし日本ではこれらの訳語は使われていない。

S1と同様に現在分詞を使う例題の種々を下記に示す。どちらも、倒置用法である。

S4: Stepping (up) to the plate for Tokyo (is) #12, second baseman, \_\_\_\_\_.

S5: Now coming up to the plate for Tokyo (is) second baseman, #12, \_\_\_\_\_.

S6: Coming up next (is) Somejima, who was struck out in his previous two at bats.

## 2) 各イニングの結果と選手交代の紹介：

攻守交代をチェンジと日本語で言うが、これは change of sides から由来している。動詞の用法は、to change sides。また、名詞用法では、side out があり、この用法はバレーボールからきている（佐藤2004:352）。その攻守交代の間、必ず「得点」「ヒット数」「エラー数」「残塁数」の順でアナウンスし、その順番は、先の選手の紹介順序よりさらに固定している。

米国大学チームは、ニックネーム（例えば the Lions）を持つが、大学名の代わりに、for the Lions と入れ替えて紹介する。この場合日本のプロ

野球のチーム名と同じく定冠詞が入り複数形になる（例：for the BayStars）。

S7: For the lions, (we have) no runs, no hits, no Tokyo errors, no runners left on base.

S8: After the bottom of the 3<sup>rd</sup> inning, (we have) no runs, no hits, no Hawaii errors, no players (runners) stranded (on base).

失策のチーム名 (Tokyo, Hawaii) が所有格になっていないが、これも簡素化の例と言える。次に残塁数の発表の時に表現のバラエティのために「走者」と「選手」を使うのは容易に納得できるが、left on base が stranded on base に代用されるのは異様に感じるが、誇張表現の一つなのであろう。類似する誇張表現の例は、「三者凡退」になった時の表現にも見られる。

S9: Tokyo is retired in order. (「東京さんが順に退職させられた」のでない。)

S10: Matsuzaka retired Ichiro in all four at bats. (4回の打席とも打ち取った。)

この retire は、打者や走者をアウトにする時、受動態と能動態のどちらも使用可能である。さらに、「永久欠番にする」という意味もある（佐藤、2004:330）。

S11: The Yankees retired his uniform number.

選手交代としてはピンチ・ランナーやピンチ・ヒッターがある。野球と違いソフトボールの場合、リエントリーの制度もある。ハワイ大学女子ソフトボールの場合、始めに監督が主審に告げ、その後主審は振り返りアナウンス部に次のように告げる：“#12 for #3”（#3に換え#12）。英語と日本語の語順の差がここに現れる。

その後、うぐいす嬢は次のように紹介する。

S12: Pinch hitting for Tokyo (is) #12, \_\_\_\_\_.

S13: Pinch running for Tokyo (is) #12, \_\_\_\_\_.

このような選手交代では守備位置はその時点で不明なため、背番号と名前だけになる。さらに投手交代では次の表現が使用されている。

S14: In to pitch for Tokyo (is) #12, \_\_\_\_\_.

S15: Now pitching for Tokyo (is) #12, \_\_\_\_\_.

S16: Now entering the game (is) #12, \_\_\_\_\_.

S17: A pitching change for Tokyo: #12, \_\_\_\_\_.

### 3) 試合経過と最終結果の紹介：

試合の途中経過は随時種々の形式で紹介されるが、S18が基本形で現在進行形で示す。なお、oh、nothing、zip や nil は得点ゼロの意味である。

S18: The Cyclones (are) leading the Bears (by a score of) one to oh  
(= nothing, zip, nil).

この文をもとに、バリエーションS19、S20、S21が可能となる。

S19: Score one to nothing, the Cyclones.

S20: One to nothing, the Cyclones.

S21: The score is 3 to 1, in Cyclones' favor.

注目される点は、省略 (Score や BE 動詞など) と得点に焦点を当てた倒置用法である。

また、S18の現在進行形とは異なる構造で、S22のように現在時制の紹介文もある。

S22: The Cyclones have one and the Bears, nothing.

i) 後追いから：後追いは、英語でも behind を使い、下記のように表現できる。

S23: The Giants are one run behind the BayStars in the last inning.

しかし、実況放送では、trail もよく現れる。この語は、一般的に「引きずった跡」、「登山道」などの意味で知られているが、レースなどでは、「跡についてゆく」、「に後れる」の意味があり、次のように表現される。

S24: After Hashimoto's three-run homer, ChibenWakayama are now trailing by just one run. (一点ビハインド)

「得点差を縮める」の意味では、narrow the gap が使われ、その反対は widen the lead となる。

S25: Ishiguro had a home run, narrowing the team's deficit to one run.

「ホームランを打ち、その結果得点を1点差に縮めた」という意味だが、ここでも、意味の転化が deficit に見られる。また、リーグ順位表 (standings) に示されるゲーム差を示す際も、deficit、trail と behind が使われる。

S26: The Giants defeated Chunichi last night, narrowing the deficit with Chunichi almost to zero.

S27: The Dodgers trail in the National League by half a game.

S28 : The Dodgers are one game behind the Giants.

ii) 同点に追いつく：同点は tie や even が使われ、能動態や受動態のどち

らも可能である。対一の場合、それぞれの意味をこめ、apiece や両チームの意味をこめ each や all も使われる。また、S33 のように、現在分詞としての形容詞用法もある。

S29: Matsui evens the score, 3 to 3.

S30: The BayStars tied the score at one.

S31: The BayStars and the Giants are tied at one apiece.

S32: The score (the game) was tied at one all.

S33: It was a game-tying (= score-tying) three-run homer. (同点に追いつく3ラン)

中盤、後半になっても依然同点の場合は、

S34: They are still tied with three runs each.

S35: The score remained tied in the 9<sup>th</sup> inning.

9回で決着がつかなければ延長戦 (extra innings) となる。佐藤 (2004:300) によると、野球においても延長の意味で overtime が使われ、それはサッカーからの転用であるとある。それ以外に、サッカーではロス・タイムという表現も使われ、英語では injury time と呼ぶ。なお、柔道試合での延長は extra time となる。S37の prevail は戦争だけでなく、野球でも「勝利する」の意味で使われる。

S36: The game went into extra innings with the score tied at four.

S37: Here's Kuroda's 103<sup>rd</sup> pitch of the game. That sends the game into extra innings and it ends up going to the 11<sup>th</sup> inning with Hiroshima prevailing 3 to 1.

12回まで延長しても同点なら、MLB ではあり得ないが、日本では、引き



分け試合となる。

S38: They finished (=ended) in a tie, three to three.

S39: They ended in a three-all draw.

iii) 逆転：逆転する前に、そのチームに勢いがついたり、優勢になったり、その好機を捉える必要がある。それらは、to give the team momentum、to get the upperhand や to capitalize on one's opportunities と表現される。後者の upperhand や capitalize には意味の転化が見られる。次に、逆転するという基本的な動詞句として、to come from behind、to reverse the score や to turn the tables がある。その他に、to drive in a go-ahead run (a tie-breaking run) も使われる。Go-ahead run は、「勝ち越し点」の意味。「逆転ホームラン」は、a come-from-behind homer。「さよならホームラン」は、a game-ending homerun、a game winning homerun、a walk-off homer (piece) と色々あり、ホームラン自体も、homer、dinger、poke など色々名称がある。誇張表現としては、downtowner (ダウンタウンまで飛ぶホームラン)、moonshot や monster shot もある (佐藤2004:279)。

iv) 最終結果：次に、最終結果の紹介文を見てみると、スコアの表現法として、数字と数字の間に to を挿入する方法と単にスコアを並列する方法がある。さらにS42は、いろいろな特徴を含んでいる。初めに、チーム名が単数扱いになっていること。次に敗者であるチームが主題になっているため、受動態になっている点。さらに、stretching と SAT で頻繁に出てくる分詞構文（結果用法）が使われている点である。

S40: The Cyclones won the game, four to three.

S41: The Cyclones beat the Bears, four to three.

S42: Softbank was beaten, four - one by Orix, stretching its losing streak to two.

通常 beat は、「打つ」という意味だが、ここでは「負かす」、「に勝つ」の意味で使われ、もっとも多く使われている動詞の一つである。TVニュースでは、notch up (刻み目をつけるから転じて「勝ち取る」や「得点する」の意味) も耳にするが、よく使われる他の動詞に、日本語でも使われる shut out (完封) がある。それ以外に、比喩表現としてゼロの形をしている理由で、to go for the horse collar や to throw goose-eggs を完封する表現に使う (佐藤2004: 221、240)。

さらに、「圧倒的勝利」を表わす動詞を列記すると、trash (ぶっ壊す)、hammer (たたきのめす、) slam (強くなぐる)、paste (完全に負かす)、wipe out (徹底的にやっつける)、また cruise to (楽勝する) もある。これらの動詞は、もともとの意味から時代を経て「圧倒的勝利」の意味に転化されてきたものと推測される。

S43: The Cyclones cruised to 7-0 (= a 7-0 win) over the Bears.

S44: The Cyclones cruised past the Bears.

反対に「僅差の勝利」は squeak (かろうじてしのぐ)、nose out (鼻の差で負かす) がある。また、edge (辛勝、僅差で破る) の例文もある。

S45: Hosei edges Kansei Gakuin 4 - 3.

連続安打や連勝や連敗の表現には、streak が使われる。またS46の「トン」は大量という誇張表現で、連続試合安打の続行中の意味 (佐藤2004:233)。S50とS51の snap は、意味が転化して「連敗や連勝をストップさせる」という意味である。

S46: Matsui had a 5-day hitting streak (= He hit a ton) .

S47: The Tigers are on a five-game winning streak.

S48: (The) Hanshin (Tigers) extended its (their) winning streak to five

games.

S49: The Giants stopped their losing streak at eight.

S50: The Giants snapped their seven-game losing streak by defeating the Tigers.

S51: Hanshin loses to Hiroshima, 9 to nothing, snapping its 10 game-winning streak.

勝率が5割を「超える」や「割る」は、比喩表現で to be above (below) sea level となり、その結果ペナントや地区優勝を勝ち取るとなると wrap up (clinch) the division となる (佐藤2004:344; 412)。

最後に、「うぐいす嬢言葉」という一つのレジスターの特徴をまとめると、上記の例文に見られるように、スコアやバッターボックスに入る動作に焦点を置く場合、主語を後付けにする倒置が目立つ。さらにBE動詞、WE HAVE、さらに所有格のアポストロフィーSの省略をあげることができる。これこそ、うぐいす嬢による SAT レジスター、簡素化使用域の特徴と言えるのであろう。しかし、反対に語彙の使用では、もともとの意味が転化したと思われる表現 (retired、stranded、deficit、capitalize、trail、snap) や逆に野球が始まった当初使われていた用法が現在では変化したにもかかわらず、依然として使われているために異様に感じる表現、(baseman、bag、sack)、さらに種々の動詞形 (prevail、trash、hammer、slam、squeak、nose out、cruise to) などの多様性や可変性が目につく。このように本来の意味から離脱し「勝利」の意味に使う用法は、SATを感知させる語彙の役割なのであろう。

この一見相反すると思われる SAT の簡素と可変性・多様性という特徴は、決り文句を駆使し現状描写を、詳細に短期間にしなければならない状況で、また常に単調にならないよう観客に紹介しなければならないニーズの中で生まれ、さらに時を越え SAT レジスターとして確立されてきたと考えられる。逆に述べれば、現在では、これらの特徴こそが、SAT レジスターを認知する効果を持っていると言える。

## II. SAT周辺英語の特徴：

SAT レジスターの特徴は、上記に示した通り、うぐいす嬢のアナウンスにも見られるが、その周辺で聞こえてくるスタジアムでの英語、例えば観客、選手、審判員の英語にも、ある一定の特徴が見られる。それを「周辺の英語」と定義する。次にその周辺の英語に耳を傾けてみると、SAT レジスター、特に「専門語彙」、「決まり文句」という面で特徴ある現象が認められる。

### 1) 審判員とその判定：

大学ソフトボールの場合、審判員3名である。主審と二人の塁審である。英語で主審は umpire-in-chief (球審は plate umpire)、塁審は base umpires となる。また、審判員の身に付ける青いユニフォームから、blue, bluecoat, boy blue, man in blue とも呼ぶ。さらに悪口や軽蔑の意味を含めた名称として blind mice、blind tom (目の悪い審判)、tin cup (目の不自由な乞食のブリキコップ) などがある (佐藤2004: 387)。これら語彙の豊富さも、SATレジスターを認知する際の一つの要因とも言える。次に審判の判定コールを聞いてみる。

S52: (The count is) two balls, one strike.

先にボール、次にストライク数をコールする方式は、メジャー・リーグの放送を通じ日本でも馴染みになり、日本のソフトボール界でもそのコールが正式となっている。この判定コール方法にも、簡素化使用域の特徴が認知される。例えば、主語と動詞の省略。さらにS52と同じ意味をラジオ実況放送では、次のような多様な形式で伝えている。

S53: It's a two and one count.

S54: Here's the count of two and one.

審判員の次の叫びは、ラジオやテレビの中では聞けないだけに、強烈に響く。

S55: Swing? (主審は、打者が右打者の場合1塁審に、左打者の場合は、3塁審へ向かってーフ・スイングの判定を下降抑揚で問う。)

S56: No. (スイングをしてないと判定した塁審は、両手を水平に広げ、セーフのしぐさをしながらコールする。すなわち止めたスイング (= check swing) と判定されたことになる。)

シドニーオリンピックのソフトボールをテレビで観戦していても、このような主審と塁審のやり取りは聞こえるはずもない。しかし、米国大学のソフトボール・スタジアムでは大きな歓声の中にもかかわらず、このやり取りが明白に聞こえる。またS55と同じ状況で同主審は次のように叫ぶ。

S57: Did she go? (「振り切ったか?」)。

後に米国大学野球をスタジアムで観戦し、同じ状況で主審がボールと判定した時に、観客が“He went. He went.” (振った! 振った!) と主審に抗議した。その時 go は「バットを振る」という意味に気づく。次回のソフトボール試合の後、同主審に直接あのS55とS57のコールについて訊ねると、「確かに両方のコールをしたが、公式国際試合ではS55が正式なコールだ」と追加説明を受ける。なお、日本の女子大学ソフトボール公式試合では、「チェック!」とコールしている。

次の主審コールは、打者が自打球を打った時のものである。日本の主審は単にファールとコールする。

S58: Dead ball! Foul ball!

ここで使われたデッド・ボールの意味は、それは自打球だったのでイン・プレイではない（すなわち試合停止中）という意味である。また判定としてファール・ボールなので次にそのようにコールする。もちろん投球が直接打者に当たった場合も、主審は“Dead ball!”とコールする。さて、イン・プレイは英語では、live ball と呼ぶが、それは「意図的によく飛ぶように製造したボール」という意味もある。また、よく飛ぶボールとして lively ball、juice(d) ball、jackrabbit などもある（佐藤2004：252, 266）。

では、日本語で意味するデッド・ボールは、S59のように表現される。

S59: Ito was hit by a pitch.

さらに、頭を狙って投球すると bean ball (beanとは俗語で頭の意味) と呼ばれ、打者をのけぞらせるために胸元に投げるボールは brushback pitch (日本語では単にブラッシュ・ボール) と呼ばれ、打者の肩を狙う危険球は knockdown pitch と呼ぶ。Face ball は、後者の二つの危険な投球を含む表現である（佐藤2004：126）。さらに、ホーム・プレートに、深くかぶさる選手には、投手からの「警告」として message pitch や purpose pitch がくることがある（佐藤2004:276, 321）。

デッド・ボールに関わるもう一つのコールは、ソフトボールの「離塁アウト」である。すなわち、走者が投球前に離塁した時の塁審によるアウト宣言である。

S60: Dead ball, out!

審判員による判定には選手や監督の退場宣告もある。大学女子ソフトボールでは、一度もなかったが、プロ野球実況放送中にはしばしばある。アナウンサーは、to be ejected というが、文献では、「首になる」という意味から、to get the gate や to get the thumb（佐藤2004:216, 384）があるが、jerk one's thumb（親指をぐいと動かす）動作から由来していると思わ

れる。

ソフトボール球場内の審判員のコールに耳を澄ますと、このようにソフトボール特有の語彙、表現をキャッチでき、それを聞いただけで「これはソフトボールだ」と理解できる、すなわちこれらの語彙や表現が、一種のレジスターを認識できるヒントとなっていると言えるのである。

## 2) 観客席からの声援：

大学女子ソフトボールの観客席には、主に選手の両親や兄弟が多い。また地元のソフトボール・ファンもスタンドを埋めている。そのようなスタンドからは次のような応援表現が聞こえてくる。

S61: (You have a ) good eye, good eye. (打者がボールを見極め、見送った時に使われる。)

S62: (You have a ) good eye, kid.

S61と同じ状況でS62もよく使われる。Good eye が一回の場合、調子をとるため kid (女子選手であっても) をつける。その結果、どちらも短い、調子の取りやすい応援となる。さらなる例をあげると、次のようになる。

S63: (Let's) Hustle, ladies.

S64: (Let's) go, ladies.

S65 (You did a ) good job, ladies.

次に「ボールを芯 (sweet spot) で捕らえろ、ミートしろ」という意味の声援は、次ぎのようになる。

S66: (You) make contact.

スタンドでは、聞こえなかったが「芯で捕らえる」という表現はその他に

も多くある。(佐藤2004: 220, 441)

S67: Meet the ball.

S68: Put the wood to it. (wood はバットの太い部分をさし、it はボールをさす。)

S69: Hit with good wood on the ball.

S70: Get good wood on a curveball.

打者に向かって「出塁しろ！」や「投球に集中しろ」という励まし言葉は(佐藤2004: 216, 366) 下記のようなになる。

S71: Get on.

S72: Stay on the ball.

応援する観客は、日本と違い「鳴り物」は使わない。そのような状況で、声だけで応援する場合、簡潔に叫ぶのが理に適っている。そのような理由で、上記の声援表現が成立すると思われる。(但し、S67からS70は、声援表現ではない。)

### 3) 守備する選手に向かって：

GET や STAY は、別の状況でも使用される。味方のショートがゴロをさばこうとしている一連の守備動作に、観客は同調しながら、S73、S74、S75を発する。

S73: Stay with it. (ボールに食いついてゆけ。)

S74: You got it. You got it. (アウトにできるぞ。)

S75: We got her. (一塁アウト！なお、her は女子ソフトボール選手を指す。)

S74では、1塁に送球中なので打者はまだアウトになってないが、すでに過



去形を使い、また観客の声援は短い調子になっている。S75は1塁でアウトにし、観客はまた1シラブルの GET を使い「やった！」と叫ぶ。観客が、主語を“WE”にしているのは、チームとの連帯感を示す表現と思われる。

次に相手チームの守備に対するヤジもしばしばある。S76とS77は、味方の打者が打った外野フライを相手選手が失策するようヤジっている文である。76のボールをさす目的語 it は、はっきり確認できなかったが文法的には必要である。「落とせ！落とせ！」の意味となる。S77は、「あぶないぞ！」という日本語に相当する。

S76: Drop it. Drop it.

S77: Trouble. Trouble. (You have trouble.)

反対に、味方打者の大フライに対しては、目で追いながら観客は次のように叫ぶ。

S78: No, No, YES !

観客は初め大飛球が捕られると想像し、NO と悲壮な声で二度叫ぶ。しかし最後は外野手の手前に落ちセーフとなり、歓喜の YES と変わる。これに類似した表現は、ラジオ野球実況放送にもある。大飛球がスタンドに一直線に飛んでゆく時の SAT である。

S79: Going, Going, Gone (Going, Going, Good-bye !)

S80: There it goes ! Seeya !

実況放送中アナウンサーは、Goodby baseball ! と絶叫する場合もあるが、これは「さよならホームラン」のことではない。さらに、Bye, bye, baby ! や Kiss it good bye ! (入りました、ホームラン!) とも言う(佐藤 2004:102)。 (参照まで、日本語アナウンサーによるホームラン描写は、

飛球時間が長いため、「伸びてゆく!」、「伸びてゆく」、「XXX! (聞き取り不可)」の三拍子、一方、二塁打の描写は、短く二拍子の「伸びる」、「伸びた!」であった。センターオーバー確認後に過去形を使用する。また、2007年度高校野球決勝戦の逆転ホームランは、「レフトへ!」、「下がって」、「見送る!」、「見送る!」であった。

NYヤンキースの Alex Rodriguez が500本のホームランを打った時、アナウンサーは前もって準備していたのか、短いフレーズでたたみ掛ける描写であった。

S81: First pitch / is hit/ high in the air/ Deep to left field/

This is fair/ Could be/ It is / Number 500!

スタンドにいる観客からの激励や声援の表現の特徴をまとめると、第一に動詞は、一シラブルの語が多い (go, make, meet, put, hit, get, stay, drop など)。力強い響きがあり、応援には適している語と思われる。第二に短く調子よい繰り返しの発話が多い。理由は調子を取りながら、応援できる有利さがある。第三に、「うぐいす嬢言葉」の特徴と同様に「省略」が見られる。命令文という形で主語の省略や、S77では主語と動詞の省略もある。

#### 4) 選手の発する言葉:

ソフトボール球場は、野球場よりはるかに狭いのでフィールドにいる選手の声が聞こえる場合も比較的多い。しかし、審判員や観客よりは離れているので、収集はかなり困難で、その分データも少ない。

フライを捕球する際、日本語では「オーライ」と言うが、それに相当する表現は、次の通りである。

S82: My ball. My ball. (It's my ball.)

S83: Mine. Mine. (It's mine.)

大学野球の男子選手は、S84、S85、S86をそれぞれ2回、またはそれ以上叫びながら捕球する。

S84: Ball! Ball!

S85: I got it. I got it

S86: I have it. I have it.

S85とS86で時制は過去形と現在形の両方が使われている。S85の場合、捕球体勢に入ったという意味で過去時制を使っているとも考えられるが、実際は捕球に行く時点で選手は、そのように発する。また、頻度としては圧倒的にS85のほうが多く使用されている。

外野手が大飛球を追いかける時、まわりの外野手は日本では、「バック、バック」と叫ぶが英語でも同じである。ただしボールが外野手の前に落ちそうな時「前、前」とは言わず、S87のように言う。

S87: In. In. (前にでろ!の意味で、原型は You draw in であろう。)

「でろ!」といえ、日本の少年野球では、「リード、リード」とコーチが離塁する選手に助言するが、米国大学野球では、何も言っていないようである。ただし、走者のリードを記述する英語は、to lean toward second や to take a lead off first base がある(佐藤2004:260, 261)。「もどれ」は、Back! と一度だけ大声で発する。

「プレイボール!」が発せられるまで、各インニング、内野手や外野手ともに投球や送球の練習をするが、時間がきて「ボール・バック」となる。この場合選手は Ball in と叫ぶ。

ファール・ボールが高く舞い上がり、スタンドに入るような場合、複数の選手が観客の注意を促すために Heads up. Heads up. (顔を上げ、ボールに注意しろの意味) 二度ほど叫ぶ。通常の会話で「注意しろ」に相当する英語は、Watch out! Look out! であるが、ファール・ボールを観客

席の塀まで追いかけていった選手に対しては、ハワイ大学野球場では、(You) have an eye. が二度繰返し発せられた。この用法はハワイのローカルな表現かもしれない。佐藤 (2004:334) によれば、その状況で You have room (余裕があるぞ) も可能である。類似の表現に、飛行機内の leg room (足元の広さ) という表現もある。

激励の英語表現は、“Go for it,” “Hold on,” “Hold out” などと多くあるが、次の表現は、個人選手の特有な癖なのかも知れないが、守備の選手を激励のために Let's go, ladies! (皆さん、がんばりましょう!) と試合中何度も繰り返すのが印象に残る。

### Ⅲ. ラジオ実況放送のSAT記述と行動描写のバリエーション:

米国ハワイ大学ソフトボール球場での「うぐいす嬢言葉」とラジオ野球放送の「SAT」とは、もちろん内容的に少し違いが認められる。1) 打者・走者の紹介、2) 各インニングの結果紹介、3) 選手交代の紹介、4) 試合結果の紹介では、両者とも同じだが、ラジオ野球実況放送では、さらに1) 投球の説明を一球ごと聴衆者に告げ、2) 打球の行方、ならびに野手の動きを随時ナレーションし、加えて3) 各選手の背景紹介もする。

初めに、アナウンサーによる投球された投球描写について記述する。ラジオ実況放送を聞いている聴衆にとって、テレビと違い映像がないので、ボールの行方はわからない。アナウンサーによる細かい投球の説明が期待される。また打球や選手の行動に関する種々の動詞が放送中、飛び交うことになる。実際に使われる英語を調べ、和製英語と比較しながら記述してみる。このセクションのデータ・ソースは、例文は主に石黒 (1984)、また語彙における意味の転移に関しては、佐藤 (2004) から、ならびに英字新聞とNHKの多重放送からである。

#### 1) SATの特徴記述:

過去の文献 (石黒1984) から、投球、打球、守備走者の記述に見られるSATの主な特徴を振り返る。

i) 投球描写：初めに、投球描写の二例（石黒1984:27）を示す。

S88: (The pitch is a) fast ball; inside; ball one.

S89: (That's a) strike on the inside.

どちらの文も、連結辞 (BE) を含む省略が特徴である。次に投球描写の順序 (球種、高さとコーナー、投球の判定) が固定化していることに気づく (石黒1984:30)。また、括弧内の for は結果を示す前置詞の用法である。他の不定詞や分詞構文の結果用法と共に SAT で頻繁に使われる。

Call:  $\left( \begin{array}{l} \text{fast ball} \\ \text{a V + ing ball} \end{array} \right) \left( \begin{array}{l} \text{height + side} \\ \text{height} \\ \text{side} \end{array} \right) (\text{for a}) \left\{ \begin{array}{l} \text{ball} \\ \text{strike} \end{array} \right\}$

高く大きく外れたボールは upstairs、低めに外れた時は downstairs と実況アナウンサーは呼んでいる。外角に外れは away、内角はずれは in とコールする。高さとコースのどちらもコールする時は、up and away や down and in となる。この場合通常は、ボールの判定だが、ストライク・ゾーンいっぱいの場合もある。日常表現から外れた特殊な upstairs と downstairs の用法は、SAT を特徴づける語彙の例と呼べる。さらにボールが低く、ワンバウンドするようなフォークボールは、in the dirt と表現され、投球がストライクゾーンのど真ん中の場合は、in the groove や pike (turnpike = 有料道路) が使われる。Pike は、ど真ん中すぎて代償、すなわち、打たれるという意味がある (佐藤2004:232, 306)。投球にスピードが乗っている場合、S90 のように zip を名詞形で使っている。

S90: He had zip in his fast ball as well as a nasty breaking ball. (NHKニュース)

また、zip のもう一つの用法は、nothing と同じく、ゼロの意味もある。

次に直球以外の球種について触れながら、日本語と英語の比較する。

カーブは curveball (またはhook) だが、さらにハンガー・カーブやスロー・カーブもある。前者は hanging curve (ほとんど曲がらないカーブ)、後者は slow-breaking curve (ゆっくり大きく変化するカーブ) と呼ばれる。これらの例では、形態素INGや現在分詞が日本語では削除される。しかし、捕球の表現の diving catch、sliding catch、leaping catch (ジャンピング・キャッチ) の日本語訳ではINGは残される。なお、小さく変化するの move、一方大きく変化するの breakとなる (佐藤2004:280)。

最近メジャーリーグでよく使われるカットボールは、直球のような速い球で手元で揺るボールのことをさすが、英語では cut fastball (又はcutter) となる。日本語では、fast と ER 省略される。同様に、riser (ライズ・ボール) も、日本語では、ER が省略される。ソフトボールの延長戦は、「タイ・ブレイク」というが、英語では tie breaker である。この場合も ER が日本語では削除される。反対に ER が残る場合もある。沈む球のシンカー (sinker) やスライダー (slider) など。

スプリット・フィンガー (ド) ・ファースト・ボールは、英語では split-fingered fastballと呼ぶ。上記の括弧が示すように、接尾辞EDが日本語の「ド」として残る場合と残らない場合もある。(医学界の informed consentの場合は、インフォームド・コンセントと「ド」が残る)。この球種は、ホーム・プレートの手前で、鋭く落ちるが、それを off the table と表現する。テーブルから垂直におちる (佐藤2004:290) 様子が容易に想像できる。

要約すると、英語の拘束形態素 (ING, ER, ED) が日本語に訳される場合、現在分詞の一部をなす ING も、過去形を形成する ED も 動作主を現すER も、保持される時と省略される時がある。

次に、「投球カウント」の描写 (石黒1984:31) は、次のようになる。

S91: Two 'n one the count. (The count is two balls and one strike.)

S92 Two 'n one count. (It's a two and one count.)

S93: Count of two and one. (It's a count of two and one.)

S91の括弧に括られた文が原型と考えると、NP と VP の倒置、さらに balls and strike の省略が見えられる。S92とS93は文頭が省略される、いわゆる prosiopesis (Jespersen 1922) の例である。

四球は、名詞形で walk、動詞句で draw (allow) a walk となる。佐藤 (2004:120) によると、四球の類義語も多い (free pass、free ticket、free trip、gift、handout、pass、ticket to first など)。満塁時の四球は、押し出し点となり、その結果三塁走者はホームインする。そこで、S94の bringing a runner home は、結果を表す分詞構文の用例 (安藤2005:241) と解釈できる。同様の分詞構文は、S25、S37やS42にも見られる。[注2]

S94: He's walked, bringing a runner home. (NHK ニュース)

投手が不調の時、内野手や監督がマウンドに向かい円陣の中で話している場面を2006年の WBC (World Baseball Classic) 決勝戦でも見たが、TV 解説者は conference (作戦会議) と呼んでいた。セット・アッパーのウォームアップのための時間稼ぎが主なる目的で、実質的に意味ある話をしていとは思えない。しかし、その集まりを conference と呼ぶのは誇張表現の一例なのかもしれない。その後に通例投手交代となる。

S95: The starter was relieved (replaced) . (先発が安心したのではない。)

ii) 打球の描写：飛んだ打球を描写する際、打球がどこに飛ぶか、投げた時点では当然わからない。だから、投手のカウントが主題となり、受動態の形式をとりながら、最後に打球の方向を示す形式をとる。このように、受動態の多いのも SAT の特徴の一つと考えられる。(石黒1984:29)。

S96: The one-two pitch is poked foul outside o' third.

S97: Three-two pitch is lifted to center.

S98: The three-one pitch is swung on and fouled back.

上記の文は、主題がカウントであるためそれが主語となり、時制は現在形で受身形であるのが特徴である。また動作主である打者名は by と共に省略されている。その後には打球の方向が付け加えられているのが共通のパターンである。

S99: The pitch swung on 'n flied into left field.

S99は、投球が主題で連結辞 (BE) が省略される例。S100は、打者名が主題の場合で、それが主語となる。また必然的に能動態となり現在形を使う。ただし、主語の打者名が省略されることも多い。S100の pop は動詞として使われているが、pop は名詞としても使われ (popup = pop fly)、ポップ・フライの意味になる。

S100: (Batter) pops it up, way up in the air in the infield.

(S96からS100: 石黒1984:28)

フライのもう一つの例に、キャッチャー・フライがある。キャッチャーの真上に垂直に上がってゆくポップ・フライを home run in an elevator shaft と呼ぶ。比喻による誇張表現の一例である (佐藤2004:238)。エレベーター・シャフトとボールの動きの共通性から、通常の意味が野球用語に転化したと考えられる。

まとめると、打球の描写は何が主題かで文が能動態や受動態になり、時制は臨場感を出すため現在形になることが多い。これを相 (aspect) の面から解釈すると、瞬時に「完了する動作」は、英語の SAT では現在形 (日本語の SAT は過去形) で示され、選手の「継続する動作描写」は、現



在進行形（日本語の SAT では現在形）をとる。この違いは、SAT 描写に緩急をつける意味で大変特徴のある点である。さらに、連結辞（BE）や動作主の省略も目立つ。

iii) 守備 / 走者の描写：一瞬に完了する投手の投球や打者の打球と比較し、守備や走者の動作描写は、瞬間性と継続性の両方がある。前者の瞬間的動作は現在形、後者の継続する場合は現在進行形で表現する（日本語の SAT では、過去形と現在形）。S101は、現在形と倒置、さらに不定詞の副詞的用法の一部である結果用法（安藤2005: 212；Bryant,M.M. 1976：138）S102 は、守備の選手がボールを追いかけ、眩しく困難な状況にあることを現在進行形で示し、結果としてうまくボールの下に入り捕球したことを現在形で記述している例である。また守備の選手とBE動詞の省略も認められる。

S101: Back to the track goes G (defense player) to make (= and as result makes) the catch. [注3]

S102: (Defense player) (is) shading his eyes, having trouble, comes in and makes the catch.

時間の経過を描写する「継続」の現在進行形は、塁上の走者や打球の表現にも現れる。進行形の効果について、Scheffer（1975）、「文のグラフィックかつプラスチック効果を高める」と表現している。映像的かつ可塑性をひきだす効果と言い直す事も可能であろう。S103 の tag は、日本語のタッチ・アップの意味で、三塁上でタッチ・アップをしてホームに帰ろうとしている描写である。

S103: Tagging at third is N. (runner) to score.

S104: Holding up at third is M. (runner).

S105: Pops it up, into left field, M. (defense player)'s gonna hafta hurry, and

it is drifting, fair ball, bounces into the seats.

S103からS105では、主題が打者でなく、選手の継続的行為であるため現在進行形と倒置が使われている (S101からS105: 石黒1984:28)。

## 2) 行動描写のバリエーション:

このセクションでは、過去のデータに加え、新たに投手と打者の描写のデータを収集し、さらに詳細な描写のバリエーションを描写してみる。

i) 投手描写: ボールを「投げる」に当たる英語は多種見られる: sling、throw、pitch、toss、hurl 等。実況放送でしばしば聞く動詞は deliver である。佐藤 (2004:308) によると、初期の野球では、投手は下手で投げなければならなかったそうだ。それを pitch と呼び、他の場合は上手で投げ throw と区別していた。現在では pitch は投手の捕手への投球に限定されるが、他の表現も多彩に使われている。

S106: Nomo ready, delivers, fast ball, inside, ball one.

剛速球を投げるは scorch でもともとの意味は「焦がす」である。さらに比喩的には表現には、aspirin、pea や keyhole fastball がある。早過ぎてそんなにも小さく見えるということであろう。反対に、打ちやすい球は、punkin (=pumpkin) や grapefruit で大きいので打ち安いとなる (佐藤 2004:108、222、255、303、323)。2007年夏の高校野球で活躍した豪速投手は、時速150キロ以上を記録し、NHKニュースでは、次のように報じた。また、S110は、日本プロ野球投手の速球描写である。

S107: This fast ball clocked in (at) 150 km per hour.

S108: Sato recorded a ball speed of 153 km per hour.

S109: In the second round at the Championships, one of his pitches was measured at 155 km per hour, a record at the high school event.

S110: His fast ball read 150K [kei] from the beginning tonight.

速球のためにバットが折れれば、bat broken となる。MLB実況放送では、次のようになる。

S111: He shattered his bat.

S112: The bat snapped into 100 pieces . (誇張表現)

理解しにくい比喩は、昔のままの描写が、変化した今でも生きて使われている時である（日本語の「つばぜり合い」のような例）。To paint the black とは、ピッチャーが「内外角」にしっかり投げるという意味で、昔はホーム・プレートを、黒く縁取りしていたことから、そこを狙って投球することを今でもそのように表現する（佐藤2004:301）。

ピッチャー交代は、勝ち投手（the pitcher of record）の権利をとる直前だったり、またはしっかりと勝利投手になってからの場合もあるが、それぞれ、NHKニュースでは、次のように表現した。

S113: Igawa needed just one more out to become the pitcher of record but was pulled from the game.

S114: Matsuzaka gave up two hits over six innings to pick up his 4<sup>th</sup> win this season (= of the season).

投手の分業（starter, setup man, closer）が徹底しているメジャー・リーグでは、完投（go the distance（go the full route））するのは、最近ではめずらしい。反対に不調のため早々の投手交代が宣言された時に聞いた表現にも the shortest distance he pitched this season と distance（NHKニュース）が使われている。

不定詞の副詞的用法（結果用法）は、S114の例にも見られる。「松坂は6

回、被安打2で、(結果として)今シーズン4勝目」。また pick up は、通常の意味から転化して「勝利を収める」となる。さらに、pick off throw は名詞句で牽制球、また動詞の用法もあり to be picked off at first は牽制球で一塁アウトとなる。

S115: The runner was hung up on a pick-off play.

上記の be hung up は刺殺と訳されるが、日本語の野球専門用語には、そのほかにも併殺 (double play) や狭殺 (rundown play) と乱暴な表現が多い。

ピッチャーが一塁手に送球する際、暴投 (wild throw) になった場合、airmail という動詞を使い、また、球が大きく横にそれる送球は sailing throw となる (佐藤2004:103、340)。これなども誇張表現としての SAT の描写特徴であろう。

S116: The pitcher airmailed the first baseman.

ii) 打者描写：天才打者と言われる選手の中でも、MLBで7年連続年間200本安打のイチローは、a batting phenomenon と呼ばれる。「打撃の現象」ではなく、「打撃の天才」と訳される。これも、誇張表現の一例であろう。また、彼の打率は常に、0.340 から0.35であり、to have a 0.350 (batting) average と表現される。小数点は数学的には、point three five と読むところ、野球では three fifty と特殊な読み方をする。野球表現には、他の分野からの転用があったが、反対にこの野球打率表現が一般用法にも転移している。例えば、to be batting a (one) thousand は、十割、すなわち「非常に順調である」ことを意味する。反対に to be batting zero は、「まったく不調」の意味となる (佐藤2004: 124)

また彼は足も速く、内野安打が多い。一塁にボールよりわずかに早く駆け抜ける彼を動詞の leg を使い表現する (S117 & S118: NHK ニュースか

ら)。ただし、相手チームのファンは、「まったくのアウトだ！」とS119 (佐藤2004:297) のように誇張表現で抗議するかもしれない。

S117: Ichiro legs it out (beats it out) to first.

S118: Fast running helped him leg out another hit.

S119: Out by a mile.

イチローは、色々な記録を塗り替えてきたが、George Sisler の年間最多安打 (257本) を2004年に破る寸前に書き留めた例文はS120で、松井の日米2000本安打直前の描写 (2007年) はS121である。

S120: Ichiro is one hit away from (short of) Sisler.

S121: Hideki Matsui of the NY Yankees is still one short of 2000 career hits in Japan and the United States.

200本の記録達成は、S122 のように表現され、さらに「打つ」は、hit 以外でもS123 の get や S124の make も可能である。

S122: Mr Matsui recorded his 2000<sup>th</sup> hit.

S123: He got his 2000<sup>th</sup> professional hit.

S124: He has now hit (made) 2000 career total hits.

次に、「ホームランの飛んだ所」という言う意味の誇張表現で downtown が suburbs がある (佐藤2004: 185、372)。また、ドーム球場では不可能だが、場外ホームランは、S125 のようになる。

S125: Matsui hit a ball over the roof (= out of the park). (佐藤2004: 300)

ルーフとは、野外観覧席の最上段指し、場外ホームラン。括弧のパークは、

球場を指し、その場合は、ホームランか場合によって場外ホームランをもさす。ドーム球場だと天井に当たると、ルールで2塁打と決めている場合もある。その場合、roof-rule (roof-top) double と呼び、エンタイトルル・ツーベース (ground-rule double) と同様な扱いである (佐藤2004:185、333)。

打者が「強打する」に当たる英語も多種見られる。英字新聞からの用法をリストする。

S126: Yabu banged (belted) it to the right field.

S127: Takatsu connected for an RBI double.

S128: Matsui connected with the first pitch for a 3-run homer.

S129: Joujima clouted (crushed/ cracked/ crashed) it over the fence (wall).

S130: Rodriguez hammered out a home run as New York beats Boston, 5 -2.

S131: Nakamura plastered (poked) a homerun for the second straight game.

S132: Ishii ripped a homer off Hanshin starter \_\_\_\_\_..

S133: Iguchi smashed (smacked/ slammed/ slugged/ swatted away) a homer.

S134: Ichiro whacked out 10 homers.

S127 やS128 の for は結果用法の前置詞である。同様な結果表現として打球描写 (A breaking fast ball for a strike) の for も挙げられる。この for 用法は、SAT における「結果」を表す表現の一つで、さらにS130は、「R がホームランを打ち、(結果として) NY がボストンを5対2で負かした」という意味で、結果を表す接続詞 (AS) の用法である (佐藤2004:108)。その他にS101、S114やS136に挙げた不定詞の結果用法、さらにS25、S37、S42、S94の分詞構文も類似の機能 (結果用法) を果たす。

日本語では、シングルヒット、二塁打、三塁打は、名詞として使う用法が普通であるが、英語では動詞用法もある。

S135: Ohka singled (doubled, tripled) to right.

同じシングル・ヒットでも、イチローのポテン・ヒット (S136) はあまりにも有名である。英語では、bloop や blooper また、山なりの打球というイメージから grenade (手榴弾) と呼ぶこともある (佐藤2004:224)。ずいぶん昔には、テキサス・ヒット (Texas Leaguer) と呼ぶ時代もあったが、不適切な表現という観点から、そのように地名をだす描写は避けるようになってきているのかもしれない。また Percentage sinker は、内野と外野の間に沈む、すなわち落ちるポテンヒットだが、打率には貢献するヒットであると佐藤 (2004:304) は述べている。

S136: In the third inning Ichiro at the plate again with a runner on second, he connected for a little blooper out of the infield to bring a runner home. (NHKニュース)

なお、S136に見られる不定詞の結果用法は、野球実況放送だけでなく、サッカーや大相撲の結果報告にも表れる。[注3]

一方、ライナーは実況放送では line drive (= liner) の連発である。文献では、hemp (麻のロープ) や clothesliner も同様に痛烈なライナーを意味する。また to lace a rope to center for a single; to rope a double に見られる比喩の rope とは、球道が横に張ったロープのように見えるところから由来している。強打はライナーだけではない。比喩で「地を這うような強烈なゴロ」を grass burner (clipper, cutter) と誇張表現する。ボールが芝生を焦がし刈るほどの速さをあらわしている (佐藤2004:223、231、334)。

ピッチャー返しの打球は、to hit back to the box となるが、このボックスとは、初期の野球では、投手が四角形のマウンドにいたからだそうだと (佐藤2004:309)。さらに投手を降板させるのも、to knock Matsuzaka out of the box となる。

「スイングを途中でとめる」は check swing で、「止めたバットに当たった」時は、checked swing といい、例として、a checked-swing grounder to first (止めたバットに当たった一塁ゴロ) となる。また打者がスウイング

する際の「手首を返す」は、動詞句では break the wrists、名詞句では broken wrists となる（佐藤2004:140、154）。ここにも、通常の意味から転移した意味用法が見られる。

打者として最悪の「三振」は、strike out で受動態や能動態で表現できる。

S137: Ichiro was struck out by Nomo.

S138: Ichiro took a called-third strike.

「見逃し三振」はS139のように、looking を使って表現する。さらに、to swing and miss for strike three のように for の結果用法も使われる。また、あまりにも好球と賞賛しながら見送るのは、admire a third strike。単なる空振りには、to hit air となる（佐藤:2004: 205、233、302、428）。

S139: Ichiro was caught looking.

S140: Caught looking, Ichiro was struck out by Nomo.

S141: He admired a third strike.

なお、三者連続三振は、to struck out three batters in row と言えるが、ある日のNHK野球ニュースでは、struck out the side と表現した。サイドとは、攻撃側を意味し、三振して攻撃を終えたと言っているが、連続かどうかは表しきれてない。イチロでも、三振が続き無安打に終わる日もあるが、それはS142のように表現できる。

S142 : Ichiro went hitless in the game against the LA Angels.

日常生活で、Sugarless や sugar-free という表現はよく聞かすが、hitless の場合は可能でも \*hit-free は不可能のようである。

次に「体を開く」打撃の悪い例を上げる。NHKニュースでは、S143のよ



うに忠実に翻訳している。しかし、文献（佐藤2004: 205, 356）によると、S144やS145の表現もある。これらの文は野球、特にダッグアウトの状況を知らないとまったく理解できないものである。

S143: He tends to open his right shoulder when he hits an inside pitch. (左打者の場合)

S144: The batter had his foot in the bucket.

S145: The batter stepped in the bucket.

S144とS145のバケツとは、ダッグアウトにある water bucket をさし、そちらの方向に体を開くという意味のようである。S144 : to have one's foot in the bucket の通常の意味は、「臆病な行動をとる」であるが、SATでは通常の意味から転化し「体を開く」の意味となる。また、はじめからオープン・スタンスで構え引っ張る打者は、pull hitter で動詞句ではS146 のようになる。

S146: The batter pulled the ball.

一方「流し打ちの選手」は、opposite-field hitter (= slice hitter) と呼ばれ、投球に逆らわない打者や広角打者は、straightaway hitter (= spray hitter) となる。また「流す」という動詞は push が使われ、「引っ張る」pull と対比される。また、「流す」は go the other way や go with the pitch と表現するようである。さらに、inside out swing といえば流し打ちのスイングで、wrong-field hit は流し打ちのヒットとなる（佐藤2004: 221, 222, 247, 295, 363, 369, 412)。

ミートの上手な打者は、contact hitter である。「バットを短く持て」は choke up や choke grip で、反対にぎりぎりまでバットを長く握るやり方は end grip と表現される。また、choke in the clutch というと「重要な場面（ピンチ）でへまをしてしまう」の意味がある。そこで、「プレッシャ

一に打てない打者」を choke hitter (= choker) と呼び、反対に「ピンチに強い打者」は clutch hitter となる (佐藤2004: 155, 156, 160, 165, 192)。

iii) 守備描写：守備のホット・コーナーである三塁手は、ライン際をしっかり守らなければならないが、その表現に hug (三塁線を抱きしめる比喩表現) を使う。または、to play on the line。一方、ライン際をあけて守備するのは、to give up the line (佐藤2004: 241) となる。

守備の選手の役割はもちろんボールをキャッチすることである。難しいゴロをうまく裁くのは pick で、反対に取りそこなうのは kick。語呂があっているが、後者は取りそこない、その上に足で蹴ってしまうから由来している (佐藤2004:255)。

試合中はしばしば打球が「イレギュラー・バウンド」することがある。英語では、bad bounce、bad hop と呼び (佐藤2004:423)、無生物主語 (grinder = ゴロ) を取り次のように表現される。

S147: The grinder took a bad bounce in front of the second baseman.

S148: The grinder took a bad (funny) hop.

S147に見られる、“to take a bad bounce” の一般用法は、「事態が悪い方向に向かう」である (佐藤2004: 114)。これも通常の意味に新しい意味を付加する SAT の例となる。日本語の「ゴロ」は、grinder から来ていると言われるが、形態素 ER が省略され、さらにゴロと訳されている。

日本語で言う「トンネル」は、ユーモラスな表現である。英語では普通 S149のように表現できるが、S150の用法はウィケットの間にボールを通させる他のスポーツ (クロケット) から転用された表現である (佐藤2004:407)。

S149: Iwasaki let the ball pass between his legs.

S150: Ishiguro let the ball go through the wickets.

外野手と外野手の間は gap と呼ばれる。しかし、自分の守備範囲内に打球が落ちた場合、そこにいるべき野手がいないと、用語の「無許可離隊」から転用された AWOL (absent without leave) という表現が使われる (佐藤2004:111)。「へまなエラー」を日本語で「ボン・ヘッド」というが、英語では bonehead play (boner) となる (佐藤2004:136)。「ウェスト・ボール」(waste ball: 釣り玉) と同様「二重母音」が、カタカナ表記には、現れないので、日本語から元の英語の表現を想像するのが困難な専門用語である。

また「矢のような送球」は、bullet (弾丸)、または、to rifle the ball to second も可能。「糸を引くような送球」は bee liner で、反対に山なりの遠投送球は、rainbow となる。比喩表現が両言語で異なるところは興味深い。比喩の差は、捕球の表現「ポケット・キャッチ」や「拝み捕り」にも見られる。前者はそのまま pocket catch と英語で表現したくなるが、実際は basket catch で、後者は clamshell catch である。また snow cone catch や ice-cream cone catch とは、グローブの先端で捕球する比喩的描写と考えられる。(佐藤2004:127、143、157、243、331、359、441)。両言語の比喩に見られるイメージの差は、文化や伝統の違いを反映しているようだ。

#### IV. 結論：「野球トーク」の構造と語彙使用に見られる特徴

SAT のレジスター研究として、ラジオ野球実況放送のレジスター研究 (石黒、1984) があるが、本論文で定義する「野球トーク」とは、プロのアナウンサーの独特なレジスターや、スタジアムで聞こえて来るうぐいす嬢、選手、審判団、応援団、もろもの周辺の英語の特徴をも含めたレジスター、すなわち、野球に関する包括的な言語使用域の一例をさす。その結果、「野球トーク」は大別しアナウンサー・トーク (アナT) と周辺トーク (周辺T) に分類され、アナTは、ルーチン描写 (briefing) と運動描写 (reporting) に分かれる。さらに、ルーチン描写は、選手交代と球種 / カウントと、さらに得点経過 / 試合結果に分かれ、運動描写は、運動動作の継続か完了に分かれる。一方、周辺Tは、グラウンド・トーク (審判団と

選手の発言)とスタンド・トーク(応援団発言)に、グラウンド・トークは、審判判定と選手間発話に、スタンド・トークは、応援とブーイングに分かれる。以上の分類を踏まえ、「野球トークの構造と文法的・音声的特徴」を図1に示す。

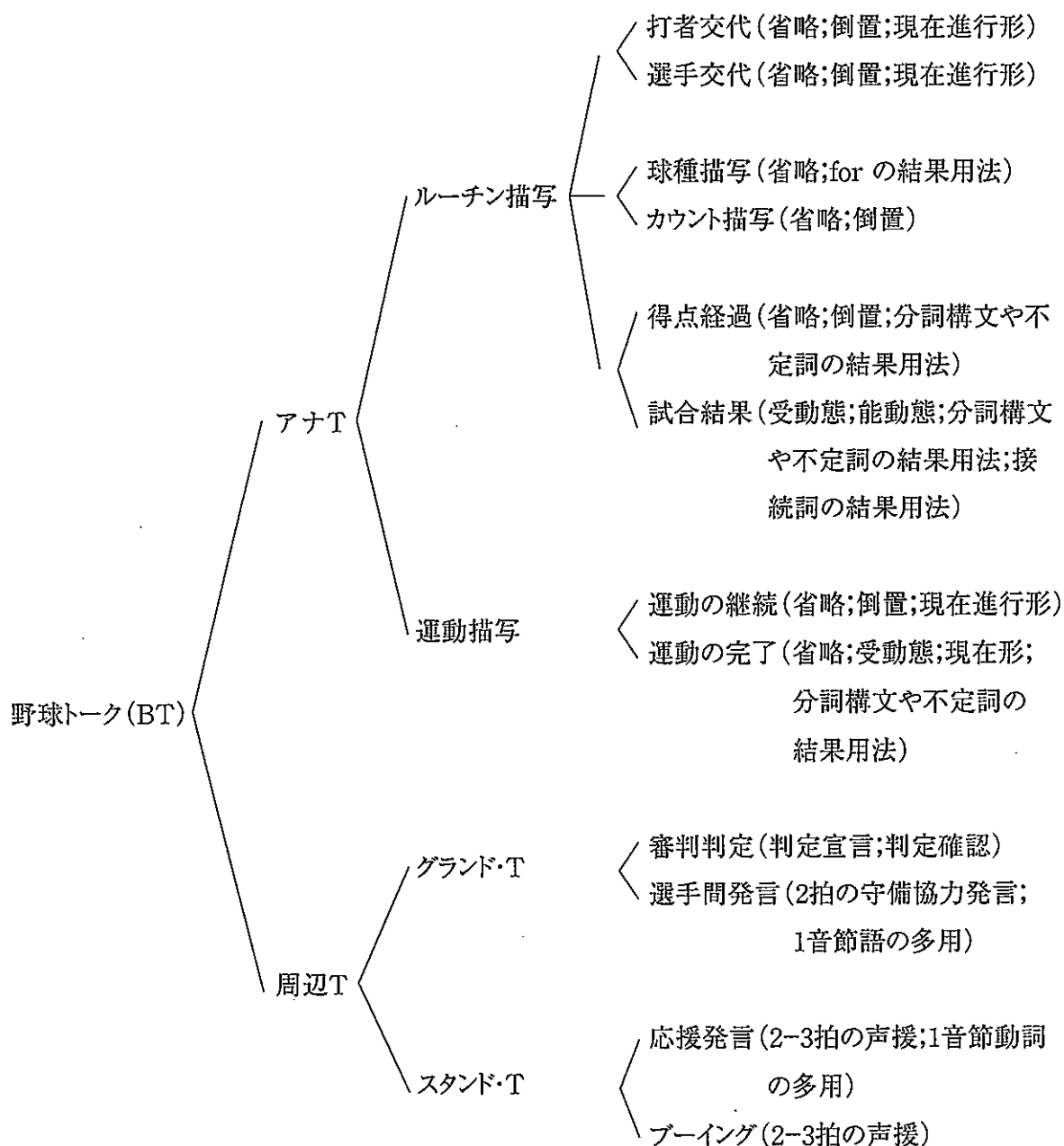


図1：野球トークの構造と文法的・音声的特徴

1) 初めにSATを瞬時に認識させる特徴の一つは、うぐいす嬢による選手の簡潔紹介 (briefing) の「決まり文句」である。アナウンス室でうぐいす嬢が持っている情報、すなわち選手に関するもの (背番号、守備位置、選手名など) を攻守交代の間に観客に流すのである。打者と走者の紹介では、連結辞を省略した現在進行形の使用と、主題を文頭に置き、主語が後置される「倒置」現象が頻繁である。各インニングの紹介では、必ずその回で入った「スコア」、打った「ヒット」、犯した「エラー」と「残塁」の数を観客に報告する。その順序も固定しているからこそルーチンとして特徴がでる。選手交代時も、ピンチ・ヒッターやピンチ・ランナーが主題なので、それを文頭に置く。その結果倒置が起き、最後に当選手の名前が置かれる。一番最後の選手名は、強勢 (ストレス) を受け観客の耳によく残る効果を生む。試合経過と最終結果も単純な形式に陥ることなく、省略や倒置を駆使し、リズムに乗ったレポートになる。試合経過には、同点や逆転というある意味では、単純な事実を繰り返すことになるが、多彩な表現を駆使することにより、ダイナミックな野球の流れを伝えようとする。なお、ラジオ野球実況放送におけるアナウンサーの投球描写は典型的なルーチンである。「球種」、「投球の高低ならびにサイド」、「結果判定」と固定した順で紹介される。

2) 球場の周辺で聞こえてくる周辺の英語は、特に選手や審判員の特徴ある発言は、テレビや野球実況放送では捉えられないものであり意味あるデータである。打者がスイングしたかどうかを塁審に確認する *Swing?* や *Did she go?* は、「鳴り物」のないアメリカのスタジアムでは、明白に塁審やスタンドの観客に伝わる。日本の主審が使う「チェック！」も一つの発見である。観客席からの声援やグラウンドの選手からの声の特徴は、繰り返し (*He went! He went!* = バットを振った! 振った! ; *In! In!* = 前進! 前進! ; *Ball! Ball!* = オーライ) や *Let's go, Ladies!* = がんばれ! のように短く調子の取りやすい激励であろう。さらに、1音節の動詞 (*get, go, stay, make,*) の使用も特徴的である。多音節の語彙より単音節のほうが、声がより遠くに届くという効果もある。奇妙に聞こえる用法は、*I got*

it! I got it! のように、まだフライを捕球してもいないのに過去形を使うことである。一方、納得ゆく動詞の用法は、ホームランの記述である。Going, Going, Gone. 同様な例は、No! No! Yes! 味方の打者の飛球を目で追いながら、悲観的に「捕球される」「捕球される」と叫んでいたのが、最終的に捕球されない。観客は歓喜に満ちた声で Yes! と終結する。

3) 「野球トーク」の第一の文法的特徴は、「倒置」と「省略」である。SAT (特にうぐいす嬢) のレジスターの文法的特徴として、スコアやバッターボックスに入る動作に焦点を置く場合、主語を後付けにする「倒置」が目立つ。さらに連結辞 (BE)、WE HAVE、さらに所有格のアポストロフィーSの「省略」をあげることができる。このような文法的特徴を持って、Ferguson は SAT レジスターを一連の「簡素化使用域」の中に含めたと考えられる。しかしながら、「省略」、「倒置」は、「日常会話」にも現れる現象である。ここで重要な点は、それらの省略 (簡素化) や倒置 (形式のバリエーション) の「頻度」が、日常会話よりはるかに多く、一瞬にして SAT を一つのレジスターと認知させる働きを持つ特徴であると解釈されることである。

第二に、動詞の現在進行形と現在形の使用であろう。例えば、打球の描写は、臨場感を出すため現在形になることが多い。これを相 (aspect) の面から解釈すると、瞬時に「完了する動作」は、英語の SAT では現在形 (日本語の SAT では過去形) で示され、選手の「継続する動作描写」は現在進行形をとる (日本語の SAT では現在形)。この違いは、SAT 描写に緩急をつける意味で大変特徴のある点である。

第三の特徴は、受動態の多用である。飛んだ打球を描写する際、打球がどこに飛ぶか、また投手が投げた時点では当然わからない。だから、投手のカウントが主題となり、受動態の形式をとりながら、最後に打球の方向を示す形式をとる。その結果、受動態になるのは当然のことである。また、打球を追う外野手の描写の際は、「継続」を示す現在分詞の使用が頻繁になる。

第四の文法的特徴は、「結果用法」の可変性である。野球やソフトボー

ルの場合、アナウンサーによる結果報告の頻度は必然的に高い。その都度その報告が単調にならないように、結果用法のバリエーション、すなわち結果表現の可変性が生じたと考えられる。初めに、不定詞の副詞用法（結果用法）、次に分詞構文の結果用法が挙げられる。さらに、前置詞 for の結果用法、最後に、接続詞 AS の結果用法と「結果」を示す文法用法は豊富である。確かに、これらの結果用法は、文法書などに載っている用法だが、SAT では口頭で極端に多く使用されているため、聴衆者に SAT を認知させる原因になるのであろうと考えられる。

4) 野球トークには、文法面での簡素化と可変性が見られたが、その上に「豊富な語彙」使用も挙げられる。第一は、「投げる」、「打つ」、「勝利する」に関する同義の豊富さである。これは、容易に理解できる。すなわち、throw と hit しか動詞がなければ、実況放送は単純で退屈なものになる可能性が大である。変化をつけるために、throw 以外にも、pitch、toss、hurl、sling、deliver を、また hit の代用に bang、belt、blast、crack、crush、hammer、plaster、rip、pound、slam、smash、whack、を巧みに使い分けている。Win 以外にも beat、crush、cruise to、nose out、notch up、squeak by (= squeak past) が使われる。第二に、表現が「誇張」されている場合が多い。描写を如実にするための機能と考えられる。投球上下の描写に頻繁なのは、upstairs、downstairs。剛速球の代表表現に、throw aspirins が挙げられる。そのぐらい小さくみえるほどの速球ということである。同様の意味に pea の比喩もある。反対にボールが grapefruit や pumpkin ぐらいの大きさ見えるのは打ちやすい球をさす。一方暴投の意味で airmail を動詞で使う用法も誇張表現である。次に、安打の記述として to hit a ton (連続安打進行中) や、打球の記述である nine miles (大飛距離)、downtowner (ホームラン) や、打球の表現の grass burner (clipper, cutter) (地を這うような強烈なゴロ) なども誇張表現の代表的例である。さらに、打率3割 (0.300) を three hundred と発音するのも一連の誇張表現の一例と考えられるかもしれない。第三に、他の分野からの表現が「野球トーク」に転用されている。経済分野から、deficit

や capitalize など。バレーボールからの転用として、side。The sides は攻撃側と守備側を意味し、side out は攻守交代をさす。また struck out the side は、三振して攻撃を終えたとなる。さらに go through the wickets はクロケットから。AWOL (absent without leave) は、軍事用語からの転用である。第四に、過去表現の存続性である。すなわち昔のシステムが現代では、変化したにも関わらず、その用法が依然使われている。名詞では、base の代わりに、sack や bag の使用。動詞句では、To hit back to the box とはピッチャー返しの打球で、昔はマウンドが四角になっていたから。また to paint the black とは、投手がコーナーを狙って投げる意味で、かつてホーム・ベースは黒く縁取られていたからだ。第五に、日米の「比喩の違い」は、文化の差を反映している。「矢のような送球」は、bullet (弾丸)、「糸を引くような送球」は bee liner となる。比喩の差は、捕球の表現にも見られる。「ポケットキャッチ」や「拝み捕り」という捕球は、basket catch と clamshell catch である。さらに、Snow cone catch は、コーンの先端にアイスクリームが、はみ出ているイメージが印象的である。両言語の比喩の差には、確かに文化や伝統の違いが反映されている。

5) SAT を瞬時に認識させる特徴のソース：実況アナウンサーやスタジアムのうぐいす嬢は、選手紹介やカウントなどの「決り文句」(briefing) や選手の運動描写 (reporting) を絶えずラジオ聴衆者やスタンドの観客に伝えなければならない状況にいる。アナウンス室のうぐいす嬢が持っている情報、すなわち典型的な例は、「選手交代」に関する情報、すなわち打席に立つ選手やピンチ・ランナーでベースに立つ各選手に関するもの情報である。背番号、守備位置、選手名などの情報も比較的固定した順序ルーチンとして紹介される。これらの情報は、通常観客に知られていないことが多い。いわゆるアナウンサーにとって既知情報だが、観客にとって新情報である場合が多い。すなわち観客にとって「制限され知らされてない情報」とも言える。だからこそ、うぐいす嬢は随時、観客に情報を流す必要があるのである。また、ラジオ実況アナウンサーの場合も同様である。テレビと異なりゲームの中の選手の動きをスクリーン上に見ることができな



い、すなわち「視覚的に制限されている」ラジオ聴衆者に対して、実況アナウンサーは、あの SAT に見られる描写形式を必然的に生みだしてきたと考えられる。すなわち、「SAT」や「野球トーク」に見られる「簡素化」や「可変性」の発生源、すなわちソースは、視覚的に情報が制限されている観客・聴衆者であると考えられる。この結論は、BT や FT を引き出すソースが、幼児や外国人の制限されている言語能力に通じるものがある。よって、「野球トーク」も視覚的に情報が制限されている聴衆のために使われる一つのレジスターと考えられる。さらに今回明らかになった野球トークを、「簡素化」と「可変性」という文法特徴と、語彙の特殊性すなわち誇張表現、可変性、また意味の転化や他分野からの転用などを頻繁に含む一連の「簡素化言語使用域」の一例と結論付けられる。

最後に、将来の研究テーマとして「野球トーク」に見られた文法的特徴や語彙の特殊性が他のスポーツ・トークにも共通に見られるかどうか、包括的なスポーツ・トークのレジスター研究をさらに追及してみたい。

[注1] 本論文で扱われている英文の校正は、神奈川大学准教授イトン・チャーチル氏にお願いした。まだ誤用があれば、すべて著者の責任である。また、神奈川大学名誉教授伊藤克敏氏には、論文に関する貴重なコメントをいただき、ここに両先生に感謝の意を表したい。

[注2] 分詞構文の結果用法は、野球実況放送だけでなく、サッカー試合の結果報告にも次のような文で使われる： Miyamoto scores again, widening his team's lead, two - zero.

[注3] 他のスポーツに見られる不定詞の結果用法：

- 1) Miyamoto scores his third goal of the game to lead his team to a comfortable five - two victory.
- 2) Aminishiki forced out Tochinonada to maintain his perfect slate.
- 3) Hakuho pushed down Homasho to improve to "seven and one."

## REFERENCES

安藤貞雄 『現代英文法講義』 東京：開拓社 2005

Bryant, M. M. Modern English Syntax. Tokyo: Seibido, 1976.

Ellis, J and J, Ure. "Language Varieties: Register." In A. R. Meetham (ed.) Encyclopaedia of Linguistics, Information and Control. 251-59. London: Pergamon, 1969.

Ferguson, C. A. "Towards a Characterization of English Foreigner Talk." Anthropological Linguistics 17: 3-14, 1975.

----- . "Baby Talk as a Simplified Register." In C. E. Snow and C. A. Ferguson (eds.) Talking to Children: Language Input and Acquisition. 209-235. Cambridge: CUP, 1977.

----- . " 'Foreigner Talk' as the Name of a Simplified Register." International Journal of the Sociology of Language 28: 9-18, 1981.

----- . "Sports Announcer Talk: Syntactic Aspects of Register Variation." Language in Society 12: 153-72, 1983.

Gregory, M. "Aspects of Varieties Differentiation." Journal of Linguistics 3: 177-98. 1967.

Halliday, M.A.K. , A. McIntosh, and P. Strevens. "The Users and Uses of Language." In J. A. Fisherman (ed.) Readings in the Society of Language. 139-65, The Hague: Mouton, 1968.

Halliday, M. A. K. and R. Hasan. "Text and Context: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective." Sophia Linguistics: Working Papers in Linguistics 6: 4-91, 1980.

Ishiguro, T. "Verb Uses in the Reporting and Briefing of Baseball Sportscasting." Descriptive and Applied Linguistics 17: 25- 35, Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics, 1984.

小池生夫 『応用言語学事典』 東京：研究社 2005

Leech, G. E. English in Advertising. London: Longman, 1966.

Reid, T. B. W. "Linguistics, Structuralism and Philology." Archivum Linguisticum 8: 28-37, 1956.

佐藤尚孝 『ベースボール英和辞典』 東京：開文社 2004

Scheffer, J. The Progressive in English. Amsterdam: North-Holland, 1975.